

府障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7 11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

「2016 みんなで考える教育のつどい」

8月28日、「2016 大阪の障害児の生活・教育を展
覧させるために」みんなで考える教育のつどい」が行わ
れました。午前中の全体会に66人、午後からの分科会に
49人が参加し、講演や実践報告を聴き、教育について大
いに語り合いました。

“自己選択” “自己決定” で 仲間と一緒に大きく成長

講師のト部秀二さん



全体会では、ト部秀二さん
(障がい青年の卒後の学びの
場・ぼほろスクエア所長)が
「かけがえない青春の主人公
に」私たちがぬきに私たちの
ことを決めないで！」の
テーマで記念講演を行いました。
始めにト部さんは、「キャ
リア教育」の流れを受けた数
値目標に就職率の向上「一般
就労100%をめざす高等支
援学校の建設」学校教育が人
格形成の場から人材育成の場
に等の攻撃が、全国の障害児

学校にかけられてきていると
述べました。また、「こうした一
般就労偏重の動きは、福祉の
現場でも強まっていると述べ、
リアルな実態を報告しました。
続いて、「ぼほろスクエア」
での実践を通して成長する青
年の、生き生きとした姿が紹
介されました。ぼほろスクエ
ア」に夏休みがないことを不
満に思う仲間と話し合い、短
縮授業日をつくったこと。お
酒を飲む「男子会」を通して、
友だちと折り合いをつけてキ
れずに、「素の自分」を出せる
ようになったこと。共感でき
るものばかりでした。

また、修学旅行に向けたと
りくみは、調べ学習・プレゼン
テーション・投票を通して行
先を決め、見どころを調べて

プランを作るといって9か月に
わたるものでした。このとり
くみを通して、「自己選択」「
自己決定」する中で仲間と一
緒に大きく成長できたとい
うお話はとても印象的でした。
青年たちの葛藤する姿やはじ
ける姿を受けとめ、「支援者
はあきらめるほど待つ」「仲間
の中で解決させる」等を大切
にしている。ぼほろスクエア
職員の方の姿勢から、学校教
育につながる大切なことを学
んだと思います。

「子どもから大人へ」学校
から社会へ「移行していく青
年期に、もっとゆっくり、青
春する」仲間とともに主人公
として生活し学び合おう」中
で自分づくりをしていく。そん
な発達の歩みに見合った豊
かな青年期教育の保障と教育
年限の延長が、障がいのある
青年や父母の願いになってい
ます。義務教育、高等部教育に
つづく、専攻科 について学
びを深め、その実現を求める
運動の大切さを実感しました。
午後は、4分科会に合計1
1本のレポートが報告されま
した。各分科会で熱い討論が
展開され、夏休みの終わりに
みんなで大いに学びを深める
ことができました。レポー
ター・参加者のみなさん本当
にありがとうございました。

- 府障教職場より報告された 実践レポート
- 「君が『うろうろ』する理由」(生野聴覚支援・佐々木直子さん)
 - 「子どもたちとファンタジーの世界を楽しむ～物語『ピータイルねこ』
の実践から学んだこと～」(堺聴覚支援・梁谷恵美さん)
 - 「卒業壁画制作への実践～メキシコでの美術経験をふまえて～」
(豊中支援・宮本奈緒さん)
 - 「進路学習の取り組みとキャリア教育PT報告」(豊中支援・中島宏子さん)
 - 「18歳からの選挙権の授業づくり」(佐野支援・芝田隼人さん)

全体会参加者の感想より
小学部時から将来のことを言われ
たり、高等部出たらすぐに就労につ
なげられてすこく違和感を感じて
いましたが、今日のお話を聞いて
なんだかスッキリした気持ちになり
ました。いろいろ悩み葛藤し、自
分の道を自分で決めて歩いてい
く。それは時間もかかるし、仲間の存在
も必要なんだと思いました。

府障教ホームページアドレス <http://www1a.biglobe.ne.jp/fushou/> Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp



自民党が、今年の6月25日から7月18日
まで、党のホームページ上で、学校教育における
政治的中立性についての実態調査を実施しま
した。この「調査」は、教育現場に「中立性を逸
脱した教育を行う先生方がいる」として、「政治
的中立を逸脱するよう不適切な事例をいつ、
どこで、だれが、何を、どのように行ったのか」
という具体的な情報をメールで投稿するよう求
めていました。この「調査」では、当初、不適切
な事例」として、子供たちを戦場に送るなが拳
げられていました。

参議院選挙が行われていた時期でもあり、自
民党が学校の先生の政治発言の密告を推奨して
いるなどの批判の音が巻き起こったのも当然
です。マスコミからも、ホームページは、偏向
した教育が行われることで、生徒の多面多角的
な視点を失わせてしまう恐れがある」とするが、
自民党はそれをそっくり自らへの指摘と受け止
めるべきだと、7月12日付朝日新聞社説など
厳しい批判があげられました。

教育基本法第14条には、「良識ある公民とし
て必要な政治的教養は、教育上尊重されなけれ
ばならない」と謳われています。18歳選挙権が
実現したもとで、子どもたちの発達段階に応じ
た主権者教育を豊かに積み上げていくことこそ、
今教育現場には求められています。政治的中立
性を口実に、自由な政治的議論を規制する自民
党の「調査」は明らかにこじつした流れに反して
います。

「中立」「公平」という言葉は本来国民が権力
者に対して使うもので、政権政党が声高に叫ぶ
「中立」「公平」ほど、中立・公平を害するものは
ありません。

「日本母親大会」に参加して

美人長命 才女多忙

8月20日・21日第62回日本母親大会が福井県と石川県で開催されました。21日に金沢市で行われた全体会には約4600人、2日間で全国からのべ9300人が参加しました。府障教からは2人が参加しました。

全体会で来賓挨拶を行った常光利恵さん(石川県各種女性団体連絡協議会会長)が、「美人長命」と言いますが、美人とは皆さんのこと。薄命ではなく、元気に長生きしてがんばりましょう。また、「仕事のできる才女は忙しい!」けれど、力を合わせてがんばりましょう」と呼びかけると、会場はとても盛り上がりました。

国際基準による女性の人権保障を



一日目は7つの問題別集会が行われましたが私たちは女性の地位とTPPの集会に参加しました。

「女性の地位向上・労働」の集会では、2016年2月16日にジュネーブで行われた国連女性差別撤廃委員会CEDAWにおける日本報告書審議に同行したNGの活

動報告がありました。審議の結果日本へ出された総括所見には、日本が前回の勧告を誠実に実施しておらず、いまだに女性差別が数多く残っていることが明らかにされています。また、日本は女性差別撤廃条約に新しい制度を追加する「選択議定書」をいまだに批准していません。条約の実効性強化、国際基準による女性の

人権保障のため、一日も早い批准が必要と考えられています。

また、安心安全な学校給食を自校方式で実施することが、地産地消の推進のために役立つとの報告もありました。民間委託では「コストをおさえるために、安心安全な食材が使用されるかどうか分からない」とのことでした。

「悪魔の島」とは呼ばれたくない

二日目の全体会では、島洋子さん(琉球新報政治部長)が記念講演を行いました。島さんは、度重なる米軍兵士による犯罪や、基地が沖縄の人の生活を支えているという間違ったイメージ(実際は基地が商業地になることで収入は32倍、雇用は100倍に増えた)など、沖縄についての報道が正確にされていないと語りました。また、辺野古に計画されている新基地は、普天間基地よりも機能が強化されますが、アメリカは沖縄だけに基地を集中させるのは危険」と考えているため、オースト

リアや佐世保などに分散させたいと望んでいると述べ、沖縄に基地を置き続けるのは、政治的にエネルギーを使



わすにすむから」という元防衛大臣の言葉を紹介されました。

鳥さんはベトナム戦争のとき沖縄は「悪魔の島」と言われたが、今度はオスプレイが飛んでくる日本全体が「悪魔の島」と呼ばれるようになる」と警告しました。オスプレイから出される低周波は、人間をはじめ生き物全体に悪影響

を及ぼしかねないというところも、合わせて訴えられました。女性が怒って団結したら大きな力になる、女性は平和の先駆者であると確認でき、「これからがんばっていきましょ」と会場にいたみんなが思えた全体会でした。(女性部 池側千加・荒木佳子)

「卒後の学びの場・専攻科を実現する会」学習会



講師の小畑耕作さん

6月26日、「卒後の学びの場・専攻科を実現する会」の学習会に、同じ職場の若い先生2人と参加しました。

始めに、「学びの場」で経験をつんだ青年たちが、どのように変わっていったのか、あるお母さんが、様々な角度から報告してくださいました。私は特に「『迷う』ことが出てきた」というこのお母さんの報告を聞いて、なるほどなあと思いました。今まで自分で考えることができて、「迷う」ということがなかった青年が、「『迷う』ようになった」と、うれしそうに報告されたお母さんのお話から、この青年の確かな心の成長が読み取れました。

続いて、大和大学の小畑耕作さんが、「青年期 高校・高等部～専攻科 教育で大切にしたいこと」というタイトルで講演しました。小畑先生のお話は、いつ聞いても分かりやすく、現場の忙しさの中で、ともすれば見失ってしまいそうなことも、改めて思い出されるような内容でした。一緒に参加した若い先生からも「待つということの大切さがわかった」「明日からの生徒とのかかわりにいかしていきたい」などの感想を聞くことができました。

私自身も、「教育実践について考えるときは、やはり子どもたちの姿や願いから出発しなければダメだな」と感じました。(情宣部:鈴木浩司)